

私たちの職場でも情報処理部署以外の方がプログラムを作成して、計算機を適宜利用するオープン方式による科学・技術計算の需要が、ここ1～2年の間に急激に増加している。

来年は日本にもCRY-1が2セット設置されるそうだ。私はかつてIBM7090が日本で運転を始めた頃、LPのささやかな計算をやらせてもらって、その能力にビックリして、“この計算機が3台もあれば日本中の科学・技術計算はほとんど吸収してしまうだろう”と真面目に考えたことがあった。それが如何に馬鹿げた発想であったかは今さら申し上げるまでもない。

オープン利用で行なっている科学・技術計算の需要を推定するに当たって、トレンド計算で延長して“5年後の需要はこの位でしょう”という予想はまったくあてにならない。計算機をより大型に取り替えれば、大きくなったように計算規模も大きなものが登場し、使い方も激しくなるようだ。

業務主管部署の人たちが実務上のニーズに追われて、自力でプログラムを作り実行するケースが多くなってきた。その中には、かなり高度なものも含まれ、情報処理部署の人たちより高いレベルに達している人も育っている。情報処理部署のプログラマーの特殊性が徐々に失なわれつつあると思われる。

先日、ある計算機メーカーの工場見学をさせてもらった。計算機工場の見学は7～8年ぶりのことであったのでかなり面喰った。広々とした敷地の中に超近代的な工場が並び構内もよく整備されていた。そこでは今話題の最新鋭機が製作されていた。1チップに64Kビットを搭載したメモリーも手にとって見せてもらった。また、実装技術の進歩も見せてもらった。これらの技術革新が大幅に配線を駆逐し、生産工程の自動化を促進したこともよく理解できた。

7～8年前の計算機工場とはまったく異なった環境になっても不思議はない。かつては配線作業やコア・メモリーの組立て作業などをやっている大勢の工具さんが目についたものである。“時代の最先端をいく計算機が人海戦で組立てられる”という声も聞いた。しかし、現在ではそういう作業がほんの一握りの仕事になってしま

った。また設計の仕事についても同様の変化がおこっているということであった。

2年前にOR学会の小林会長が“80年代のコンピュータ業界はブルーカラーの仕事が大幅に縮小されるので、ブルーカラーをホワイトカラーに移動させる必要がある、その再教育が問題だ”という主旨のことを言われたことを思い出し、それを実感をもって理解できたと思う。

さらに、そのメーカーの説明によれば小型機並みの価格でも速度は速くメモリーも大きいのでTSSを構成し、言語も計算機を意識しないで書けるようなものを提供するそうだ。そうなるとメインテナンスの仕事は業務主管部署でやっていけるようになって、情報処理主管部署は現在でも受注残に悩んでいるので、それらの新規業務に没頭できるようになるだろうということであった。

こうしてみると、これらの技術革新はユーザーにも影響を与えることになりそうだ。つまりユーザーの情報処理部署のプログラマーは少数の専門家を残しておけばあとは要らなくなるということが考えられ、プログラマーの特殊性が徐々に失なわれていくのではなから

うか。もしそうなったらプログラミングだけ達者な人たちはいったいどうなるのだろうか。

このことはOR屋についても言えることで、かつてはORの手法に詳しい人は、何かと相談もかけられ重宝がられもした。しかし、計算機が普及しORの手法も普及して、各人が自分で考えて自分で計算をして確かめるようになれば、OR屋は講習会要員になり下がり、そのうちにそれも要らなくなってしまうだろう。近頃は大学の種々な学科でORの手法を教えるようになったので、その可能性は多分にあると思う。

ORは普及しなければならぬ。一方、OR屋の在り方について考えてみる必要があると思う。

どうかするとOR学会の会員は大学関係者と少数の篤志家によって占められ、実践に役立つOR的な仕事はOR学会の会員以外の人々によって行なわれるという妙なことになりかねない。否、その方向に進んでいるのかも知れない。もし、そうなったらORがORでなくなるといふことであろう。

(M. M.)

OR屋の在り方について